「なぜ遊ぶ」体系的に検証

遊びと創造性の研究

比嘉　佑典著

遊びの本質と創造との関係を独自の視点から論じた本書は、教育学者でありながら、児童文学者（『海やからドンドン』で青い海文学賞）でもあり、沖縄の海のような透明な心とおおらかさをもつ、著者の人柄が結実した成果である。遊びの本来的な意義を見つめ直す上で、有益な書といえるだろう。

創造とは新しいものを創り出すことであり、すでにあるものをまねる模倣とは反対の語である。遊びの主流をしめるごっこ遊びは、はじめは「指導して型にはめても、その次は発展的に模倣させ、その模倣を越えさせることによって創造が生まれる」（第9章）と、著者はいう。つまり遊びは対立概念にある模倣を出発点としながら、創造を生みだす原動力となっている、という指摘は傾聴にあたいする。

幼児教育は遊びを通して、子供の創造性をより豊かにすることを目的としている。遊びが創造と深い関係にあることは、これまでも指摘されてきたが、創造の視点から体系的に遊びを説いた研究は見当たらない。それが本書の出発点だ。

長年の遊びと玩具の研究、実践活動の経験、創造性の開発や研究などの蓄積を集大成した本書は、膨大な文献・資料、聞き取り調査など、あらゆる主張を時系列にとらわれることなく、再構成している。

近年少子化・地域社会の変化など、遊びをめぐる環境が変化し、本来自由であるはずの子供の遊びでさえも、大人によって管理されることが多い。そこで子供の自発的な遊びを保障しようという動きが起こっている。これは子供たちが遊びの中で、工夫や創造する力を養っていることに、今更ながら大人が気づいたからだ。

「人はなぜ遊ぶのか」。19世紀の後半に入り、遊びへの関心は高まり、さまざまな議論が展開されてきたが、最も遊びが生活化している児童の遊びに注目し、検証した本書は、時宜を得ている。

人間の持つ創造性の役割について改めて問い直してみたいと、考えさせられる1冊である。

（是澤博昭・大妻女子大学准教授）

学術出版会　6300円

／ひが・ゆうてん　1940年名護市屋我地生まれ。東洋大学アジア地域研究センター長。創造性教育、児童文化、社会教育専門